

## 濱田徳海舊藏敦煌文獻再考

—— 國立國會圖書館藏本と北京伍倫國際拍賣公司本をめぐって

岩本篤志

### はじめに

筆者はかつて「國立國會圖書館藏敦煌文獻小考」なる論文を發表し、國立國會圖書館に所藏される中國西域出土資料45點（「敦煌等經文」のうち42點とその他3點）とその由來について検討した（岩本〔2015〕）<sup>1</sup>。それは主要な先行研究である施〔1995〕、榮〔1996〕のほか、林・陳〔2007〕、池田〔2013〕等をふまえ、日本の公立機關にどのような過程を経て、中國西域出土資料が所藏されるに至ったかをより鮮明にしようという意圖であった。國內外の機關に所藏された西域出土資料の公開・圖版の公刊があいついだことと國會圖書館が所藏する「敦煌等經文」のほとんどがデジタル公開されたことも、その作業を容易にした。

いうまでもなく中國西域出土資料には、漢字文化圏のみならず、内陸アジアおよびユーラシア大陸の歴史の一端を解明する上で重要な史料になり得るものを多數含んでいる。ただ、注目されるにともない骨董的價値を見いだされ、眞贋問題が生まれることになった。どのような経路で、現在の所藏先に至ったかは、こうした眞贋の手がかりになるのみならず、西域出土文獻の研究史の點からも重要である。

本稿では、新たに廣く披露されるに至った北京伍倫國際拍賣公司本（以下、伍倫本）と國立國會圖書館藏「敦煌等經文」（請求記號WB32-148、以下、國會本）と

---

<sup>1</sup>前稿においては、國會圖書館所藏「後周顯徳二年曆斷簡」（請求記號WA37-9）と舊藏者の新城新藏との接點について十分に分析がおよばなかった。ここにその點を補足しておく。2015年5月に京都大學理學部宇宙物理學教室圖書室を訪れ、新城新藏のノートを閲覽させていただく機會を得た。そのうち、昭和9年（1934）3月の四分冊の内の冒頭の一冊に、中國の古曆目錄が記され、「顯徳二年（955）◎所持」とあるので、昭和9年3月以前には後周顯徳二年曆を所藏したと考えられる。その他の記録とあわせるとその入手は大正15年～昭和9年の間であることまで特定できた。新城がかねてから關心を抱いていた「東洋古代の天文學に關する材料の蒐集及整理」の一環として入手したとみられる。

の関係を論じると同時に、それがどのような由來を持つものであるかをあらためて考察する<sup>2</sup>。その際、前稿で見落としていた資料などをあわせて紹介したい。

## 1. 伍倫本の出現

2016年8月19日、中國のオークション会社である北京伍倫拍賣有限公司が30餘件の南北朝・唐代の寫經を競賣するとの報道があり、2016年8月30日から9月10日まで首都圖書館で展示會が開催された。それらは2016年9月22日から9月24日には北京の湖南大廈（ホテル）で展示され、翌25日には、同ホテルでおこなわれた伍倫2016秋季文物藝術品拍賣會で展示品はオークションにかけられた<sup>3</sup>。

この競賣にあわせて、敦煌佛教文獻の研究者として世界的に著名な方廣鋳を編著者とする『濱田德海蒐藏敦煌遺書』（方〔2016〕）が刊行された。方〔2016〕では、全36點をカラー圖録によって紹介し、方廣鋳による序文と司馬立心による解説、そして『國家圖書館藏敦煌遺書』と同様の、個々の資料の諸元を示した條記目録が付された。

これらは方〔2016〕に言及されているように、國立國會圖書館所藏「敦煌等經文」（以下、國會本）と同じく、濱田德海が蒐集した中國西域出土文獻を含む漢文寫經中心のコレクションに由來するものである。ただ方〔2016〕では、北京伍倫拍賣有限公司がどこから濱田コレクションの一部を入手したのかは明示していない。また、方〔2016〕は、國會圖書館が濱田所藏品を購入した際に「日本敦煌學界の著名で權威ある學者」が、すべて贗物だとしたため、購入計畫は途中で頓挫したが、ここに掲載される二十數件に贗物は含まれていないとしている。ただし、

---

<sup>2</sup>卷末表は、それぞれの請求記號（整理番號）、定名および付加情報、他目録への収載、池田〔1990〕への掲載・番號、印記、紙數、備考の項目で構成した。他目録の略語は基本的に前稿岩本〔2015〕とほぼ同じで、以下の通り。「安」…安藤〔1939〕、「濱」「濱附」「栗」「山」…東京大藏會〔1944〕、「村」…村口書房〔1951〕、「井」…ABAJ〔2010〕。なお國會本のみ「敦煌」の項目をつけ、「非」としたのは非西域出土文獻である。

<sup>3</sup>「伍倫拍賣推出三十餘件南北朝唐人寫經」（報道記事）

<http://auction.artron.net/20160819/n859027.html>（2016.11.17accessed）

王惠民「濱田德海舊藏敦煌遺書簡介」（2016.9.26付、專家による紹介）

<http://public.dha.ac.cn/content.aspx?id=816685432177>（2016.11.17accessed）

「伍倫2016年秋季文物藝術品拍賣會-濱田德海舊藏敦煌遺書專場」（全點寫真有り）

<https://www.artfoxlive.com//match/2537?index=1&totalElements=36&size=30>

（2016.11.17accessed）

「藝搜」

<http://artso.artron.net/>

「敦煌寫經」（簡體字）の検索により、本オークションの個々の成約價格などが閲覧可能。なお上記サイトのいずれもが2018年1月30日時点でも閲覧可能であった。

その條記目録によればいくつかの寫本の題記などは、後世に付け加えられたものであるとしており、近代人の手が加わったものが含まれることは認識されている。

本稿では、まずすでにおおかたが分賣されたとみられる「伍倫本」を手がかりの一つとして濱田徳海がどのように中國西域文獻を蒐集したかを可能な限りたどってみたい。また筆者はここで扱った中國西域文獻を寫眞や畫像でみたにすぎない。したがって眞贋には觸れず、中國西域文獻がどこからどのように移動したのか、そこにどういった背景があるのかを考えることに力點をおくことにしたい。巻末に、國立國會圖書館所藏の「敦煌等經文」と「伍倫本」を目錄化したものを付した。

すでに岩本〔2015〕で言及したように、また方〔2016〕も言及するように、現在、國立國會圖書館が所藏する「敦煌等經文」が、昭和37年（1962）から38年にかけて、どのような経緯で購入されたのかは、昭和35年12月13日の衆議院における國會圖書館副館長の豫算概算請求に關する質問と答辯に示されている<sup>4</sup>。

それによれば、濱田徳海なる人物が、日中戦争の時期、中國に長く大藏省の役人としていた關係で敦煌文獻を數十點所有したが、近年（昭和33年、1958年）亡くなった。そこで國會圖書館は専門家の示唆をうけ、全部を一度には購入できないものの半分くらいを購入した、という。

この濱田徳海（はまだのりみ：1899～1958）とは、大藏省に勤務した稅務を専門とする官僚で、1939年8月に興亞院事務囑託となり、同年12月から翌年5月まで支那派遣軍司令部付として陸軍顧問を勤め、1945年には中華民國國民政府（汪兆銘政權）の全國經濟委員會顧問に就任したとされる<sup>5</sup>。

彼の蒐集品に關連して、前稿、岩本〔2015〕では、次のようなことをあきらかにした。國會本（「敦煌等經文」のうち42點）および古書肆および展覽會のカatalogによって、濱田徳海のコレクションは100點をこえる規模であったと推定されること、コレクションには、実際には日本國內の舊藏者を確認できるものが多數含まれており、「中國に長く大藏省の役人としていた關係で敦煌文獻を數十點所有していた」という説明はコレクションの性格として十分でないこと、コレクションの一部には李盛鐸没後に行く末が注目された「敦煌文獻」の一部とおぼしきものが含まれているということ、であった。

伍倫本はこれらの推測をおおよそ裏付けると同時に、いくつかの新しい知見を示唆する。

まず、方〔2016〕の條記目録をみればわかるように、伍倫本にはほぼ全點に「濱

<sup>4</sup>衆議院會議情報 第037回國會議院運營委員會圖書館運營小委員會 第1號より。

<sup>5</sup>JACAR Ref. A04018768700（アジア歴史資料センター）「大使館參事官濱田徳海大正九年敕令第三百六十七號第一條二依り中華民國國民政府全國經濟委員會顧問トシテ中華民國國民政府ノ聘用ニ應スルノ許可ヲ與ヘ竝在職者ニ關スル規定適用ノ件」（國立公文書館）

田徳海蒐集中國古代寫本寫經・寫本・文書コレクションの内、整理番號〇番」と「濱田番號」が付されていた。最も大きな番號は「伍倫 36」につけられた「整理番號 144」番であり、たしかにコレクションの規模は 100 點以上と想定される。

そして前稿ではあえてふれなかったが、濱田コレクションの賣買に長いこと東京本郷の井上書店が関係してきたことは、British Library の解説や井上書店の古書販賣目録にあきらかである<sup>6</sup>。例えば、ABAJ 日本古籍商協會が 2010 年に刊行した『國際稀覯本フェア』販賣カタログ (ABAJ [2010]) 中の井上書店のページには、「濱田徳海蒐集中國古代寫本寫經・寫本・文書コレクションの内」と記された敦煌文獻 (とみられる) 10 點の出品があり、その整理番號の比較的大きな數字には「192」番がある。さらに同出品目録に載せられた「八陽神咒經」の藏書印や題記などの特徴は<sup>7</sup>、伍倫 19 番 (卷末 [67]) の「天地八陽神咒經」そのものである。「整理番號 84」番という情報も一致する。すなわち「伍倫本」の出所は日本の井上書店とみて間違いのないし、コレクションは 200 點ほどの規模だったことになる。

戦前の日本でおきた「古寫經蒐集ブーム」において、当時、裕福だった一部の知識人や骨董に興味のあった富豪たちは、日本の古寫經のみならず敦煌寫經をも買い求めた (反町 [1998:199-216])。現在の日本ではそうしたコレクターや富豪の存在はきわめて少なくなった一方で、富裕な人が増えた中國ではそうした文化財に興味を持つ人々や財力のある機關が増加し、こうした品物が高い注目を集めているようである。

ところで、筆者は、これまで、以上の考察に關係する肝心な資料を見逃していた。次にこの資料とあわせて検討をすすめたい。

## 2. 「敦煌寫經の大口」

筆者は、前稿では主に國會本と展覽會のカタログなどによって、濱田徳海のコレクションの性格を考察した。ところが、うかつにも國內の書誌研究においては最初にみるべき資料を見逃していた<sup>8</sup>。

それが古籍商であった反町茂雄による『紙魚の昔がたり 昭和篇』(反町 [1987]) におさめられた當時の井上書店の店主、井上周一郎と反町との對談である。そこ

<sup>6</sup>British Library に據点を置く International Dunhuang Project (IDP) では次のように説明している。「The National Diet Library has a collection of forty-eight manuscripts from Dunhuang and other Silk Road sites most of which were originally in the Hamada collection and were acquired through the Inoue Bookshop.」

<sup>7</sup>「徳化李氏木齋閣家供養經」の印記と、「清信俗弟子瓜州行軍兵馬都倉／曹盧安多発心抄寫持誦一心受持」という識語があることなどがある。

<sup>8</sup>京都大學での口頭発表の際に、高田時雄氏より示唆をうけた。

に「敦煌古寫經の大口」「十年契約を三年で破約」と見出しが付けられた部分があり、次のような内容が記されている。

- ・井上書店は昭和28年（おそらく38年の誤記か誤植）に濱田徳海の遺族から敦煌の古寫經などを購入した。
- ・コレクションは200点ほどあり、まとめて購入してくれる図書館・蔵書家を探してくれるよう依頼されたが、なかなか引受先がみつからなかった。
- ・濱田は、日本の軍部が中國の華北方面に進出していた時代に、公の機關のそれなりの地位で北京に駐在しており、その際に敦煌から出た古寫經類を集め、敗戦前に東京に戻った。
- ・敗戦後の混乱期、昭和22年から25、6年に、反町氏をはじめとした古書肆は多くの敦煌寫經を扱い、濱田はそれらを購入していた。
- ・國會図書館がコレクション購入に名乗りを上げたが、一度に支拂いが出来ないで十年の分割購入となった。しかし國會図書館は三年ほどで購入をやめた。
- ・京都大學の藤枝晃氏が國會図書館の相談にのり、優先して購入すべき三年分を選んだらしい。
- ・重要文化財の指定を受けていたものなどは國會図書館への最初の譲渡分には敢えて含めないようにしてあり、國會図書館の未購入分は井上書店が遺族から分割拂いで購入した。

以上の内容は、先述した「昭和35（1960）年12月13日の衆議院における國會図書館副館長の豫算概算請求」とほぼ矛盾しないと同時に、新しい知見も少なくない。

とくに國會図書館蔵「敦煌等經文」の購入に藤枝晃氏が関わっていたとする点はいままでにはない情報で、きわめて重要であろう<sup>9</sup>。これによれば、方〔2016〕に、「國會図書館が濱田所蔵品を購入した際、「日本敦煌學界の著名で權威ある學者」が、すべて贋物だとしたため、購入計畫が途中で頓挫した」ように記しているのは、まとはずれな憶測となる。なぜなら、この「日本敦煌學界の權威ある學者」が、京都大學の藤枝晃を指すことは研究者間では衆目一致するところだからである。藤枝が偽寫本の存在を聲高に指摘したことは、「コディコロジー」の深化にもつながったが、日本の敦煌文獻の所蔵者・蒐集家を萎縮させた。しかし、それは國會本の購入より10年以上も後のことである。むしろ、藤枝〔1985〕の論文では、謙虚に

<sup>9</sup>國立國會図書館が、濱田蔵品の購入を開始した年に記された國立國會図書館〔1962〕には、「東洋文庫長 岩井大慧の仲介によって」とある。

自身の鑑定の至らなさを反省しているくだりがあって、國會圖書館の相談に載った際には比較的良品の購入を示唆したつもりだったが、研鑽を積むにつれて不十分な點に気づき（多数の寫本に不自然な加工が見られたことに業を煮やし）、偽寫本の研究に着手したように讀める。

では、次に濱田が公務で北京滞在中に敦煌から出た古寫經類を集め、日本の敗戦前にそれを東京に持って歸ったとする反町の見立てについてはどうであろうか。筆者は前稿で濱田のコレクションには、日本での蒐集品が少なくないことを指摘したが、反町は濱田が戦後の日本で敦煌寫經を蒐集していたことも認識している。取引さえしたこともあるらしい。また國會本と同じ濱田舊藏コレクションに由来する伍倫本には濱田以前に日本人が舊藏者であったことを明示する資料がとぼしい。つまり、濱田のコレクションは日本國內の市場で入手したものが多いたとした前稿の筆者の推定は当たっておらず、「日本國內の市場で入手したものもある」と考えるべきと思われる。

これについて國會本および伍倫本で、手がかりになりそうなのは、「一馬題」とある書誌學者川瀨一馬による箱書きである。卷末一覽の備考欄に示したように、84點中7點に川瀨の箱書きがあり、[8]と紀年のない[12]をのぞいた5點([7] [45] [64] [69] [82])はいずれも「昭和癸未冬日」(1943)の紀年があって、同時期に同じ依頼者が書かせた可能性が高い。(8)には「昭和庚申」(1920)年の紀年があるが、昭和19年(1944)の『第三十回東京大藏會展觀目錄』時に栗原氏の所藏品であったので(東京大藏會[1944])、その箱書きは栗原氏かそれ以前の所有者が川瀨に依頼したとみることができる。一方、「昭和癸未(1943)冬日」の箱書きがある5點は、いずれもこの箱書き以外に日本人が舊藏していたことを明示するものがない。反町がいうように、濱田が日本の市場で敦煌寫經を拾い集めたのが昭和22年(1947)以降であるとすれば、濱田は1943年頃にはすでに多数の中國西域文獻を所藏しており、その一部について川瀨に箱書きを依頼した可能性を考えて良いであろう。また『昭和法寶目錄』(昭和4年、1929年刊行)所收の「日本人諸家所藏敦煌寫經目錄」「日本未詳所藏者敦煌寫經目錄」(以上は『敦煌遺書總目索引』、商務印書館、1962年に轉載)に掲載された敦煌文獻と、濱田舊藏の「國會本」と「伍倫本」とに題名が一致するものは必ずしも多くないことも、濱田が中國の舊藏者か業者から直接入手した可能性を示す裏付けのひとつにはなる。

前掲のように濱田は1939年8月には興亞院事務囑託となっているので、その頃からしばらく北京に滞在、または往來して敦煌の古寫經類の一部を集めた可能性はある。

### 3. 濱田徳海コレクションの形成過程の推定

#### (1) 李盛鐸舊藏品との関係

では、1939年から1943年の時期に北京では敦煌文献または敦煌寫經はどのように流通していたのであろうか。その特徴は濱田蒐集品には反映されているのだろうか。

まず、巻末の84点の目録中に、李盛鐸舊藏品または李氏一族の蔵書印が捺されているものが5点存在することに注目したい。巻末一覧の番號と印記は次のとおりである。

[5]「木齋審定」、[14]「木齋審定」、[16]「合肥張氏閣家供養經」・「木齋審定」、[55]「徳化李氏凡將閣珍藏」、[67]「徳化李氏木齋閣家供養經」

[16]は冒頭に佛畫があり、そのほかはいずれも紀年があるという点で、いずれも寫經としては顕著な特徴を有する。[16]については前稿(岩本〔2015〕)にも記したとおり、押縫印のように用いられた蔵書印は違和感がある。[14][16][55]はそれら紀年・題記のいずれにも疑義があり、[67]の「徳化李氏木齋閣家供養經」の蔵書印も李盛鐸の生時の印とは考えられない<sup>10</sup>。いずれも眞贋に直結する證據とはいえないが、蔵印を捺した時期をふくめ、高價に賣買するためのなんらかの細工がなされた可能性を拂拭できない。李氏の蔵印は彼の没後、濫用された可能性さえあると考えられている(藤枝〔1995〕)。ただ、印の眞贋で資料自體の價値を判断することは適切ではなからう。

李盛鐸が多數の敦煌文献を所藏していたことは、當時からよく知られており、早くから羽田亨が接觸していた。そして李盛鐸が亡くなった翌1936年に息子の李滂は、舊藏敦煌文献432点を羽田亨に譲渡した(高田〔2007〕)。そしてそれら432点全てが羽田の手を経て、杏雨書屋に所藏され現在に至ることが判明している。

ところが當時、北京に在住していた文筆家、安藤徳器はその著書および雑誌に「燉煌經卷蒐集記」(安藤〔1939〕)なる一文を載せており、1939年初頃(記事によれば「2月19日の舊正月の直前」)に李盛鐸舊藏敦煌文献賣却の情報を聞きつけ、購入を畫策した顛末を記している。安藤は、北京で顔が廣い作野秀一が李家から預かってきたという50点ほどの敦煌文献をみせられ、その素晴らしさに感動し、作野とともに金策に奔走したが、全部で500点近いと聞いていた李盛鐸所藏敦煌

<sup>10</sup> [14][16][55]の紀年については、池田〔1990〕参照。岩本〔2013a〕では、杏雨藏敦煌祕笈を中心に、李盛鐸および親族に關わる印記毎に仕分けし、「徳化李氏木齋閣家供養經」「木齋珍藏／唐人祕笈」「木犀藏書」の3種の印の出現は、李盛鐸没後であることなどを示した。

文献は、銀行家の王克敏に先に購入されてしまったという。そしてその文末に、自身が閲覽を得た敦煌文献の題名を記している<sup>11</sup>。そこに記された47点のうちにある「金録晨夜十方懺」、「釋門教授」、「佛說解百生怨家經」、「達磨禪師論」などは敦煌文献の資料名としては希有で、注目される。

前稿でも指摘したように、「金録晨夜十方懺」([3] と同名)は「正統道藏」未載の道教の經典名である。神塚〔2013〕によれば、「金録晨夜十方懺」は英國に一點、佛國に一點、國會本は英國本(S.3071)と同一寫本の一部(接續はしない)であるという。英佛の所藏品はスタイン・ペリオの將來品であるから、安藤がそれを1930年代の北京でみることはありえないし、道藏未收の佚書の書名が知られていたとは考えにくい。しかも國會本の[3]が題名のある部分である。つまり安藤が目撃したものは、王克敏のもとに入った後に、濱田を経て、最終的に國會本となった可能性が高い。

そしてそのようにみていくと、この安藤が掲げたりストは濱田の中國西域出土寫經蒐集に關わる重要な手がかりにみえてくる。

本稿に付した84点の目録からは漏れるが、上掲の「釋門教授」は、井上書店の販賣カタログ(井上〔1995〕)に載せられた「子年三月五日計料海濟受戒衣鉢具色目一々如後文書 唐時代寫 傳敦煌出土 麻紙 紙背「釋門教授」(見出しママ)のことであろう。カタログには白黒ながらそれなりの大きさの寫眞も付けられており、吐蕃期の敦煌の寺院の資料とみられる。安藤は、この紙背の「釋門教授」を資料名としたように思われる。

また「佛說解百生怨家經」は、井上書店の2010年のカタログ(ABAJ〔2010〕)に掲載された「解百生怨家陀羅尼經」(濱田德海蒐集・整理番號77)とみられる。なお「佛說解百生怨家陀羅尼經」は2017年6月に行われた北京保利十二週年春季拍賣會に出品・落札されており<sup>12</sup>、その際の寫眞と井上書店の2010年のWeb版カタログの寫眞に據れば、同一品とみてよい<sup>13</sup>。

さらに他にも日本所在の「敦煌文献」の題名と比定可能なものがある。例えば「達磨禪師論」である。該當するものは『達磨大師の研究』で取り上げられ有名になった藥師寺所藏敦煌文献とされる「達磨禪師論」であろう<sup>14</sup>。もちろんどのよう

<sup>11</sup>この47点の題名については梶浦〔2002〕に轉載されている。

<sup>12</sup>北京保利國際拍賣會 <http://auction.artron.net/paimai-art5105190137/> (2018/1/4 accessed) なお、これは、現・成賢齋藏敦煌文献第25號(CXZ025)にあたる。(于〔2014〕)の寫眞によれば、濱田舊藏本にしばしば見られる川瀨一馬の箱書きが確認できる。

<sup>13</sup><http://www.abaj.gr.jp/>の下位ページ「2010年國際稀覯本フェア」の井上書店のページ(URL記録無し)(2010.3.11 accessed)。畫像入りで10点の中國西域出土資料が掲載されていた。内容は紙のカタログ、ABAJ〔2010〕と對應している。

<sup>14</sup>關口〔1957〕。なおフランス藏のP.2039の首題が「天竹國菩提達磨禪師論一卷」とある。



な経路で薬師寺に至ったかは不明であるが、王克敏の入手品に由来する可能性はあると推測したい。

なお、この4点以外の敦煌寫經については、よく見られる寫經名であって同一資料か否かを確認するのは容易ではないが、安藤が目にした何点かが濱田の手に渡ったとみられる。ここで王克敏（1873～1945）について辭典類を参照しておこう（橋川時雄〔1940〕、徐友春〔2007〕）。王克敏の字は叔魯、中華民國の政治家、銀行家、外交官である。1901年（光緒27年）、清朝から日本に派遣され、1913年（民國2年）、フランス外遊後に中法實業銀行董事に就任した。そして1917年7月には中國銀行總裁となるも1918年に辭任し、1920年以降には中法實業銀行總裁、天津保商銀行總理、中國銀行總裁などを歴任し、1932年には冀察政務委員會の委員となった。日中戦争勃發後の1937年に親日政權樹立作業に着手し、12月には中華民國臨時政府が成立する。そして1939年6月、王克敏は汪兆銘と合流の交渉をはじめ、翌1940年（民國29年）3月に南京國民政府が成立した。しかし、日本の敗戦により、1945年12月に漢奸として逮捕され獄中死した。

このように主に財政畑をわたってきた経歴や日本寄りの政權樹立をこころみた王克敏と、税と財政の専門家として北京や中華民國國民政府（汪兆銘政權）に派遣された濱田とになんらかの交流があった可能性は高い。ただ、現段階では論證する準備はない。

以上をまとめると、李盛鐸が舊藏した主要な敦煌文獻432点が羽田亨に譲られたあとに、その「遺族」たちは500点にもなる「李盛鐸舊藏敦煌文獻」を賣却しようとして畫策し、その相當数が王克敏の手に渡った。そしてその一部が直接か間接かは不明なものの、濱田が入手した。安藤が見た「李盛鐸舊藏敦煌文獻」は、その後市場に出現した李氏藏印が捺されたものとの關係を考え得る。そしてこれら（またはこれに類する品）は中國國內だけでなく、少なからず蒐集家がいた日本にも相當數、流入したと推測される<sup>15</sup>。

## （2）そのほかの舊藏者たち

次に伍倫本によってあらたに判明した濱田コレクションにみられる舊藏者についてとりあげておきたい。

<sup>15</sup>高田〔2015〕に、現在の杏雨書屋「敦煌秘笈」に關して、羽田—武田は李盛鐸舊藏の敦煌文獻432点を入手してまもない昭和14年（1939）から17（1943）年の間に江藤濤雄（長安莊）から146点もを購入したこと、江藤長安莊からのこれら購入品にしばしば「木齋審定」「德化李氏凡將閣珍藏」といった李氏の藏印があること、同時期に江藤から入手された守谷孝藏舊藏コレクション中の20点（京都國立博物館藏品）の李氏藏印に、藤枝〔1985〕が疑義を呈したことが指摘されている。

[56] は中國西域文獻の舊藏者としてはよく知られた許承堯（1874～1964）の藏印が捺されている。許の中國西域文獻の収集については、余〔2005〕に詳しい。

[50] [83] の舊藏者は、楊士驄（1870～？）とみられる。字は芟青、安徽泗縣出身で湖南財政監理官、山西鹽政使を歴任し、1913年～22年には衆議院議員となっている（徐〔2007〕）。

また [54] の舊藏者は、徐鴻寶（1869～？）とみられる。浙江省吳興縣出身で、舉人となり、北京大學圖書館長、京師圖書館主任、圖書京師圖書幹部主任などを歴任している（徐〔2007〕）。

[51] [52] [81] の藏印、[66] の曹善祥、については現段階では不詳である。また「八郎題」とあるのは、日本で箱書きがなされたもので、おそらく古筆家で國文學者の尾上紫舟（1876～1957、本名：尾上八郎）によるかと思われる。「八郎題」の箱書は [11] [54] [58] [62] にも見られる。ただし名前からの推測にすぎない。

前稿の國會本の検討においては、孫揆均、林熊光、顧二郎、王樹枏、康有爲などに言及したが、伍倫本にも、顧二郎、康有爲とみられる藏印が捺されているものがある。

このように、濱田舊藏本は、多數の中國人の舊藏者の藏書印が確認できるという点では、『國家圖書館藏敦煌遺書』の一部や日本に私藏されている敦煌文獻の多くと似ており、その收藏の経緯にはどこかに共通性が見いだせる可能性があるだろう。

このことに関しては、藤枝〔1985〕の「ある敦煌寫本頒布會の記録」という一節に紹介された資料が想起される。1918年に162巻の敦煌寫本を7巻ずつ23包にわけ、北京の文化界、政界、財界の一流名士に抽選で一包ずつ分配したことを記した資料である。それによれば、その頒布を受けた者にはすでに敦煌文獻を多數所藏していることが知られていた李盛鐸も含まれていたという。1913年までには外國の調査隊や北京政府が現地からほぼ持ち去ったか、それなりの場所に保管された（または李盛鐸のような個人の手に入った）後にも、このように「敦煌文獻が」大量に出回り、李盛鐸さえその購入者となっていたことに對し、藤枝はそれらの出所をおおいに怪しんだ。しかし、以上みてきたような濱田舊藏本からわかるように、民國期の多數の知識人が敦煌文獻等の中國西域出土文獻を所藏していた（しようとしていた）ことは、1913年から1940年代の中國における「敦煌文獻」への關心とその流通狀況を示していると思われる。

ところで、前稿においては濱田徳海は、栗原貞一、山合喜三郎舊藏の敦煌文獻の一部をも蒐集したことと、濱田へ讓渡された年代を推測したが、それは反町が

いう「昭和22年から25、6年」に符合する<sup>16</sup>。

またこの間に、濱田徳海は、銀行家で禪籍の善本蒐集で著名であった石井光雄（積翠軒）が舊藏していた敦煌寫經をもそのコレクションに収めたいらしい。なお石井の善本書目は川瀬一馬の編であり、そこに國寶・重文を含む7點の敦煌文獻が著録されている（川瀬〔1942〕）。

石井がその膨大な藏書を賣却することになったのは、まさに昭和23年（1948）のことであった。この藏書處分の顛末についても、反町〔1987〕収録の村口書房の店主、村口四郎との對談でもふれられている。そこには、敦煌文獻がどこに譲渡されたかは記されていないが、村口書房がその藏書の處分を任されたことがわかる。

そして、石井の敦煌寫經が最終的に濱田に譲渡された時期を推測させる資料がある。それが1951年の1月30日から2月1日まで大阪の阪急百貨店で催された中國古書展に際し、村口書房が作成した『燉煌出土墨寶展覽目錄』（村〔1951〕）である。そこには25點の資料名とあわせて、それぞれの特徴が1, 2行で記されており、現存品との比較がしやすい。また石井積翠軒舊藏で知られた國寶の「神會語録」と「歷代法寶記」、重要美術品の「達磨絶觀論」も掲載されている。前稿では慎重を期して、この目錄に掲載された25點のうち少なくとも11點が濱田の舊藏品（國會本）としたが、伍倫本の出現によって、[49] [54] [70] [71] もこの目錄に掲載された同一資料と確認できる。さらに石井積翠軒舊藏敦煌寫經のうち、「神會語録」「歷代法寶記」「達磨絶觀論」は、重要文化財収録の圖録（毎日新聞社・重要文化財・委員會事務局〔1977〕）に、濱田氏の遺族の所有名義と記録されている。そうしたことから推測して、1951年のこの展覽目錄に掲載された全25點が濱田コレクションの一部とみてよいであろう。

『燉煌出土墨寶展覽目錄』は、1951年時に石井積翠軒舊藏敦煌寫經等の譲渡成約を記念し、「濱田徳海蒐集中國古代寫本寫經・寫本・文書コレクション」の逸品25點を収録したものだったように思われる。

## おわりに

以上のように、濱田コレクションは、アジア史研究に缺かせない中國西域出土文獻の蒐集品という一面だけでなく、李盛鐸逝去後1930年代後半から北京などで繰り広げられた「李盛鐸舊藏敦煌文獻」數百點をめぐる「騒動」と「敦煌寫經」の

<sup>16</sup>岩本〔2013b〕および岩本〔2015〕。

持主の交替という戦前から戦後への日本の社会的變化を刻んだ蒐集品という側面ももっている。

李盛鐸が逝去し、彼の敦煌文獻はごっそりと羽田に譲渡された後の1930年代後半に、北京在住の安藤徳器はたまたま「李盛鐸舊藏敦煌文獻」の一部を見ることを得たが、結局は王克敏がそのおおかたを落手した。ちょうどその1939年に大藏省主税局から興亞院囑託へ異動となった濱田徳海は時に40歳、北京に着任し、その一部を入手する機会を得たと思われる。そして1944年には東洋文庫で開催された第30回東京大藏會でそれらの一部を披露し、一躍、古寫經蒐集家や古書肆の注目を集める存在となった。

まもなく第二次大戦が終わると、多くの蔵書家がコレクションを手放さざるを得なくなったのとは逆に、濱田はそれらを拾い集めるように蒐集し、ついには國寶指定まで受けた寫經を入手、コレクションは200点近い規模に成長するに至った。

1958年、濱田が逝去すると、コレクションは賣却されることとなり、國會圖書館が専門家の意見を参考に一部を購入、全部は購入されなかったもので、井上書店がその他を引き受けた。そしてそれらは長いこと購入者を待ち続け、近年に至って中國の市場を賑わせているということであろう。

今後、こうした資料をとおして、近代に手が入られた箇所や偽造品を慎重に除外すれば、北朝隋唐、吐蕃・歸義軍期の敦煌およびその周邊地域の實態に迫ることや、逆に近代に手が入られた箇所に注目して、敦煌文獻と1913～1930年代における中國の知識人層または日本の蒐集家との関係についての考察への展開も可能と思われる。

## 引用文獻

### ・日文

ABAJ〔2010〕『2010年國際稀覯本フェア』（販賣カタログ）、東京、ABAJ日本古書籍商協會、100～101頁

安藤徳器〔1939〕「敦煌經卷の蒐集」、『茶わん』第98號、同著『滿支雜記』東京、白楊社、1939年、39～47頁

池田温〔1990〕『中國古代寫本識語集録』、東京、東京大學東洋文化研究所

池田温〔2013〕「敦煌寫本偽造問題管見」、土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』修訂版、東京、東洋文庫、154頁

- 井上書店〔1995〕『人文系古書綜合目錄』第57號（1995年夏、古書販賣カタログ）
- 岩本篤志〔2013a〕「敦煌祕笈所見印記小考」、『内陸アジア言語の研究』第28號、129～170頁
- 岩本篤志〔2013b〕「大東急記念文庫藏敦煌文獻來歴小考」、『立正史學』第114號、1～24頁
- 岩本篤志〔2015〕「國立國會圖書館藏敦煌文獻小考」、『立正大學人文科學研究所年報』第52冊、19～35頁
- 梶浦晉〔2002〕「大正・昭和前期の京都における敦煌學」、高田時雄編『草創期の敦煌學』東京、知泉書館、109～126頁
- 神塚淑子〔2013〕「國會圖書館所藏の敦煌道教寫本」、『名古屋大學文學部研究論集(哲學)』第59號、59～87頁。同著『道教經典の形成と佛教』、名古屋、名古屋大學出版會、2017年、324～361頁
- 國立國會圖書館〔1962〕「敦煌寫經の收藏について」、『國立國會圖書館 月報』11號、24頁
- 關口眞大〔1957〕『達磨大師の研究』東京、彰國社
- 反町茂雄〔1987〕『紙魚の昔がたり 昭和篇』東京、八木書店
- 反町茂雄〔1998〕『一古書肆の思い出3——古典籍の奔流横溢』(平凡社ライブラリー)東京、平凡社(初版：同社刊、1988年)
- 高田時雄〔2007〕「李滂と白堅」、『敦煌寫本研究年報』創刊號、1～26頁
- 高田時雄〔2015〕「日藏敦煌遺書の來源と眞偽問題」『敦煌寫本研究年報』第9號、1～17頁
- 東京大藏會〔1944〕『第三十回東京大藏會展觀目錄』(昭和19年11月12日於東洋文庫)、東京
- 橋川時雄〔1940〕『中國文化界人物總鑑』、北京、中華法令編印館
- 藤枝晃〔1985〕「「德化李氏凡將閣珍藏」印について」、京都國立博物館『學叢』第7號、153～173頁
- 毎日新聞社・重要文化財・委員會事務局〔1977〕、『書跡・典籍・古文書IV(重要文化財)』、東京、毎日新聞社
- 村口書房〔1951〕『燉煌出土墨寶展覽目錄』、大阪、阪急百貨店

・中文

- 方廣鋁主編〔2016〕『濱田德海蒐藏敦煌遺書』、北京、國家圖書館出版社

- 林世田・陳紅彥共著〔2007〕「敦煌遺書近現代鑑藏印章輯述」、『文獻』2007年第二期、(上)33～52頁、同第三期(下)、129～142頁。再録：林著『敦煌遺書研究論集』北京、中國藏學出版社、2010年、272～319頁
- 榮新江〔1996〕『海外敦煌吐魯番文獻知見録』南昌、江西人民出版社
- 施萍婷〔1995〕「日本公私收藏敦煌遺書敘録(三)」、『敦煌研究』1995年第4期、51～70頁。同著『敦煌習學集』下、蘭州、甘肅民族出版社、2004年收載
- 徐友春〔2007〕主編『民國人物大辭典』、石家莊、河北人民出版社。99～100頁。
- 于華剛主編〔2014〕『世界民間藏中國敦煌文獻1』、北京、中國書店
- 余欣〔2005〕「許承堯舊藏敦煌文獻的調查與研究」(『敦煌學・日本學——石塚晴通教授退職紀念論文集』上海辭書出版社、150～192頁、加筆再録「“搜奇癖古入肝膈”——許承堯舊藏敦煌文獻的調查與研究」(同著『博望鳴沙——中古寫本研究與現代中國學術史之會通』、第三章、上海、上海古籍出版社、第2章、81～123頁)

\*本稿執筆にあたり、東洋文庫内陸アジア出土古文獻研究會および中國中世寫本研究2017夏季大會での口頭発表に際していただいた多くのご教示を利用させていただいた。また國會圖書館職員である福林靖博さんから前稿で缺いていた資料等の示唆を受けた。ここに謝辭を記しておきたい。

(作者は立正大學文學部准教授)

國會本・濱田舊藏文獻

請求記号	敦煌	国会図書館による定名、書誌（一部修正）	目録	池田	印記	紙数	備考 ※〔施〕=施（1995）、〔栄〕=栄（1996）
[1]	WB32-1	金剛般若波羅蜜經（寫 1卷）	濱10			12.5	木軸（朱軸）あり。〔施〕は敦煌出土とする。
[2]	WB32-2	金光明最勝王經 卷第9（寫 1卷）				13+小2	箱書：八郎題
[3]	WB32-3	金録晨夜十方懺殘卷（寫 1卷 残背文字あり）	安			3	背面：諸寺付經曆〔栄〕、王卡〔2004・2007〕、神塚〔2013〕
[4]	WB32-4	四分戒本（寫 1卷）				21	箱書：五代写四部戒本 不折審定、背：完全無欠〔施〕
[5]	WB32-5	浄名經闡中釋抄 卷上（道液撰集 寫 1卷）	村24	1075	木齋審定	25	紀年：乙丑年常興記
[6]	WB32-6	大乘顯識經 卷上（寫 1卷 卷末に唐永隆元年とあり）			朗庵秘笈、林氏家藏、朗庵秘玩	不明	林朗庵の識語あり〔施〕。林朗庵については栄〔1995〕
[7]	WB32-7	大乘無量壽經（寫 1卷）	村23			5	箱書：昭和癸未冬日 一馬題
[8]	WB32-8	大方便佛報恩經 卷第1（寫 1卷）	栗40			18+小1	箱書：昭和庚申春吉辰 一馬題、背面：不明印記
[9]	WB32-9	大方便佛報恩經 卷第2斷卷（寫 1卷 朱字經）	栗36 村14		願二郎	4+小1	
[10]	WB32-10	大般若波羅蜜多經 卷第174（寫 1卷）			松藏閣	16	箱書：昭和甲申晚秋日 隆古齋題
[11]	WB32-11	大般若波羅蜜多經 卷第214（寫 1卷）	濱25			15+小1	箱書：八郎題
[12]	WB32-12	大般若波羅蜜多經 卷第351（寫 1枚 着色厘綉付 掛軸）	濱26			1	箱書：屏繪附唐写敦煌經 一馬題、背面題箋「大般若經卷三百五十一 一馬題」
[13]	WB32-13	大般若波羅蜜多經 卷第593（1卷）		1261	南海藏經	14+小1	
[14]	WB32-14	大般涅槃經 卷第12（寫 1卷 卷末に大隋大業2年…とあり）	濱附8	449	木齋審定〔栄〕	不明	題記：大隋大業二年歲次丙寅比丘釈善藏奉為亡妣張夫人敬造〔施〕、李盛鐸旧藏〔一覽〕
[15]	WB32-15	大般涅槃經 卷第15（寫 1卷 卷末に大業4年12月…とあり）	村15	461		12+小1	題記：大業四年十二月十五日（中略）清信仏弟子尹嘉礼受持〔施〕
[16]	WB32-16	大般涅槃經 卷第22（寫 1卷 卷首に着色佛像畫）			合肥張氏閣家供養經、木齋審定	15+小1	箱書：昭和二三年九月 田山方南敬題
[17]	WB32-17	大般涅槃經 卷第31（寫 1卷）	山49			6	題字：孫道毅〔施〕
[18]	WB32-18	大佛頂如來密因修了義諸菩薩萬行首楞嚴經 卷第9（寫 1卷）	山附1			17	
[19]	WB32-19	佛說灌頂章句拔除過罪生死得度經（寫 1卷 卷尾欠 着色厘綉付）	山51			2	
[20]	WB32-20	非 佛說護國經（寫 1卷 卷首欠 譯場列位付）	山附9 村25	2558		4	紀年：大宋咸平二年十一月、虫食い箇所から非敦煌資料と推定〔施〕
[21]	WB32-21	非 佛說金剛手菩薩降伏一切部多大教王經 卷下（寫 1卷 訳場列位付）		2553	楊守敬印等多数	14	高山寺本〔施〕
[22]	WB32-22	佛說尊勝羅尼經呪（寫 1枚）				1	背：敕婦義軍節度使瓜沙等州〔栄〕
[23]	WB32-23	佛說八陽神呪經斷卷（寫 1卷 紙背に大平興國9年…とあり）				不明	紀年。定名は不適切で別の道教經典カとする〔施〕
[24]	WB32-24	佛說法句經（寫 1冊 卷末書名：佛說法句經 禪秘要經 大弁邪正經）				不明	定名は不適切で、仏説大弁邪正經とすべき〔施〕
[25]	WB32-25	妙法蓮華經 卷第2（寫 1卷）	濱8		願二郎	22	
[26]	WB32-26	妙法蓮華經 卷第2斷卷（寫 1卷）	栗附15			3	箱書：昭和甲申晚秋日 隆古齋題
[27]	WB32-27	妙法蓮華經 卷第3斷卷（寫 1卷 授記品第6の前半）				2+小1	
[28]	WB32-28	妙法蓮華經 卷第6（寫 1卷）				15+小2	
[29]	WB32-29	西域法寶遺韻（寫 1帖 寫經斷片貼付）			晉卿 新城王樹楠	68片	袋書：西域法寶遺韻 方南学人題、識語。〔施〕
[30]	WB32-30	道教叢書殘卷（寫 1卷 紙背に別文）				2.5	箱書：癸酉夏日、宝宋室主人による。背：仏教願文。王卡〔2004〕、神塚〔2013〕
[31]	WB32-31	佛名經斷卷（寫 1卷 着色佛像1體）				1	
[32]	WB32-32	佛名經斷卷（寫 1枚 各行首首採印佛）				1	
[33]	WB32-33	佛名經斷卷（寫 1枚 各行首印佛）				1	箱表：大宝積經第四十口 神護寺將來 箱内：昭和二五年臘月日 田山方南敬題、33と34の2点取納。箱違いか。
[34]	WB32-34	佛名經斷卷（寫 1枚 着色佛像12體）				1	
[35]	WB32-35	寫經斷卷（寫 1枚）				4	首羅比丘經〔施〕
[36]	WB32-36	寫經斷卷（寫 1枚 妙法蓮華經卷2譬喻品第3）				1	
[37]	WB32-37	寫經斷卷（寫 1枚）				1	草書
[38]	WB32-38	寫經斷卷（寫 1枚 着色佛像4體）				1	金剛般若波羅蜜經〔施〕
[39]	WB32-39	寫經斷卷（寫 1卷）			南海藏經 陶齋	7	大般涅槃經卷第十八梵行品第八之四〔施〕
[40]	WB32-40	非 寫經斷卷（寫 1枚）	濱附12			12	比丘羯磨法（擬）・朱で界線を引く日本写經で顔用される料紙〔施〕
[41]	WB32-41	非 西夏文字寫經（寫 1卷）				5	大方広仏華嚴經經卷第七十四〔佐藤〕、箱書：八郎題
[42]	WB32-42	非 西夏文字寫經（寫 1卷）				17.5	大方広仏華嚴經經卷第七十四〔佐藤〕
[43]	WB32-43	西藏文字寫經（寫 1卷）				12	箱書：等觀拜書、無量壽宗要經〔岩尾〕
[44]	WB32-44	西藏文字寫經（寫 1卷）			裴文達	18	無量壽宗要經〔岩尾〕
[45]	WB32-45	西藏文字寫經（寫 1卷）				5	箱書：昭和癸未冬日 一馬題、無量壽宗要經〔岩尾〕
[46]	WB32-46	非 一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經（刊 1卷）	濱27			4	杭州雷峰塔出土〔施〕、箱表：大宝積經第四十四口護寺將來 箱内：昭和二五年歲晚 田山方南題。箱違いか。
[47]	WB32-47	敦煌寫經2種合裝（寫 1卷）					四分律、一点不明〔施〕
[48]	WB32-48	隋經斷卷（寫 1卷）				2.5	箱書：昭和庚辰如月 松声珍藏？

伍倫本・濱田舊藏文獻

	整理番号	方広鑑氏[2016]による定名	他目録	池田	印記	紙数	備考
[49]	伍倫01	妙法蓮華經卷2	村10	548		2	紀年：顯慶五年三月十四日
[50]	伍倫02	妙法蓮華經卷5			隋經室主、壽石齋秘藏印、三佛庵主、士聰、師壽石齋説目怡情之品	5	
[51]	伍倫03	敦煌洪潤郷洪池郷百姓借貸契約（擬）			楊氏永寶	1	
[52]	伍倫04	妙法蓮華經卷6			不明、俊峯	21	
[53]	伍倫05	妙法蓮華經卷6					
[54]	伍倫06-1	妙法蓮華經（小字本）卷5	村15		曾歸鴻寶、寒梧山莊、徐鴻寶審定記	19	箱書：八郎題
	伍倫06-2	妙法蓮華經（小字本）卷6					
	伍倫06-3	妙法蓮華經（小字本）卷7					
[55]	伍倫07	妙法蓮華經卷7	濱附10	483	德化李氏凡將閣珍藏	5	箱書きは、「妙法蓮華經妙音菩薩品第卷廿四」紀年：武徳六年三月七日（疑）
	伍倫07-2	妙法蓮華經卷18及題記（擬）					
	伍倫07背	裱補紙殘片（擬）					
[56]	伍倫08	妙法蓮華經（八卷本）卷8			歛許范父游隴所得	9	
[57]	伍倫09	大般涅槃經（北本宮本）卷31	濱16		二郎（願二郎）	12	
[58]	伍倫10	大般涅槃經（思溪本）卷18				6	箱書：八郎題
[59]	伍倫11	大般若波羅蜜多經卷67	井8	1115		17	
[60]	伍倫12	大般若波羅蜜多經卷284					
[61]	伍倫13	大般若波羅蜜多經卷第328	濱24	1015		13	紀年：大蕃歲次戊戌年三月二五日（疑）
[62]	伍倫14	大般若波羅蜜多經卷第484	濱13	912		18	紀年：建中二年歲次辛酉十二月朔日（疑）、箱書：八郎題
[63]	伍倫15	大般若波羅蜜多經卷539	濱附2			13	
[64]	伍倫16	金光明經卷4	濱18		浄土寺藏經	16	箱書：昭和癸未冬日 一馬題
[65]	伍倫17	金光明最勝王經卷10			不鮮明	12	
[66]	伍倫18	釋摩男經			為善最樂、賜壽、曹善祥印	5	曹善祥の題跋(1930)あり
[67]	伍倫19	天地八陽神咒經	濱14 井6	2082	德化李氏木齋閣家供養經	3	曹慮安題記
	伍倫19背	佛經殘片（擬）		11点		四部律疏卷1、阿弥陀經、四部律疏卷1、金光明最勝王經卷10、四部律疏卷1、阿弥陀經卷6、金光明最勝王經卷10、四部律疏	
[68]	伍倫20	大智度論（異卷）卷19			南海藏經 陶齋鑑藏書畫	13	
[69]	伍倫21	思益梵天所問經卷1				21	箱書：昭和癸未冬日 一馬題
[70]	伍倫22-1	思益梵天所問經（小字本）卷1	濱19 村21			19	
	伍倫22-2	思益梵天所問經（小字本）卷2					
[71]	伍倫23	思益梵天所問經（聖本）卷3	村22		南海藏經	19	不折審定
[72]	伍倫24	維摩詰經卷下				7	
[73]	伍倫25	觀世音經			不鮮明	4	
[74]	伍倫26	大乘入楞伽經卷7				3	
[75]	伍倫27-1	黃仕強傳（擬）			南海藏經	21	
	伍倫27-2	普賢菩薩說證明經					
	伍倫27-3	證香火本因經第2					
[76]	伍倫28	勸善經				1	紀年：貞元十九年甲申歲正月廿三日(?写真になし)
[77]	伍倫29	維摩詰所說經卷1				13	
[78]	伍倫30	羯磨				16	箱：比丘羯磨文疏
[79]	伍倫31	和菩薩戒文				1	
[80]	伍倫32	五月五日上菜人名目鈔（擬）				1	
[81]	伍倫33	佛名經（十六卷本）卷1			實事求是 雨農山莊	4	
[82]	伍倫34	妙法蓮華經卷18及題記（擬）				2	箱書：昭和癸未冬日。一馬題。
[83]	伍倫35	大般涅槃經（思溪本）卷27			隋經室主、壽石齋秘藏印、三佛庵主、士聰、師壽石齋説目怡情之品、芟青所得至寶、泗州楊士聰芟青鑒藏金石書畫印	16	題跋：樂土莊嚴 等觀
[84]	伍倫36	瑜伽師地論義疏（擬）				2	朱筆有り。箱：云何菩提斷卷
	伍倫36背	殘地契（擬）					